東南アジア研究　14巻3号　1976年12月

ビルマの壁画（Ⅳ）

――コンバウン時代を中心として――

大　野　　徹*

Wall Paintings of Burma in the Konbaung Period

Toru OHNO

Frescoes painted in the *Konbaung* period differ in various aspects from those painted in the *Nyaungyan* period. The main features of the latter have been described in my previous paper entitled "Wall Paintings of Burma in the *Nyaungyan* Period." Frescoes of the *Konbaung* period have the following features:

(1) The contour of the face of both sexes is oval, while throughout the *Nyaungyan* period it was either plump quadrangular or upside-down triangular. The protuberance of one side of men's cheeks, which was a remarkable feature in the *Nyaungyan* period, is not found at all in the *Konbaung* period.

(2) Men of superior position wear long robe-like garments with long sleeves instead of the short, close frocks with short sleeves resembling a T-shirt, which men in the *Nyaungyan* period wore without exception. They never wear trousers but long loin-cloths, called "*pahso*", that reach to the ankle. The hair is knotted and tied on the forehead.

(3) Outside the palace women generally wear their hair in a bun on the nape of the neck. Though their costume closely resembles that of women of the *Nyaungyan* period, it may be noted that a long shawl is thrown loosely over the shoulders, and a "*htamein*", a skirt of great length, which trails upon the floor, is worn.

(4) Soldiers carry muskets besides swords and spears. Foreign cannoneers and artillery men may also be found on the walls of certain temples.

(5) Perspective is expressed by the upper and lower portions of walls. It can be safely assumed that the method of painting scenes, especially trees, houses and other edifices, became extremely elaborate.

Ⅰ　コンバウン時代の壁画の特徴

コンバウン時代（1752～1885）は，ビルマ壁画史の上では最も充実した時代であり，色彩的にも技法的にも繊細華麗な作品が少なくない。仏塔，寺院の内部または仏塔寺院に関連した建

*　大阪外国語大学ビルマ語学科

造物の中に描かれている関係で，画題はいずれも仏伝，本生譚と無縁ではあり得ないが，人物の容貌や身のこなし，衣装，装飾など当時の風俗や人々の暮らしが画の中に反映されている点も興味をそそる。この当時描かれた壁画には年代不詳の作品も少なくないが，年代が確定している作品と比較する事によってその製作年代を推定する事は可能である。

ニャウンヤン時代とコンバウン時代とを区別する画法上の主な特徴としては，(1)描かれている人物の容貌，服装が両者間で異なる。(2)後者は前者に較べて人物の身のこなしがしなやかであり，衣装の表現にも繊細さが加わって迫真性を帯びている。(3)前者では背景の樹木や山の描き方がきわめて形式的，類型的であるが，後者では写実的で自然の姿に近くなっている。(4)前者ではまだ区別されていなかった遠近が，後者では壁面の上下によって表現される（例えば，アーナンダ煉瓦寺院，ポーカラー寺院，チャウトオヂー寺院など）ようになっている，などを挙げる事ができる。中でも人物の容貌と服装とは，画の年代を判定する上できわめて重要な手掛かりとなる。

コンバウン時代になると，当時の人々の服装について非常に有力な手掛かりが他の面からも得られる。それは，この当時ビルマ王室に派遣された外国人使節の日記，旅行記，見聞記の類に書き残された数々の挿絵である。例えば1795年にインド総督によってビルマへ派遣されたサイムズ，翌年派遣されたコックス，1855年に派遣されたユールなどは，その旅行期間中観察したビルマの姿を丹念に記録している。[1] これらの旅行記の中に描かれている挿絵，なかんずく人物画から当時のビルマ人の服装上の特徴を列挙してみると次のようになる。

（Ⅰ） ウンヂー（元老），ウンダウ（元老補佐），アトゥインウン（枢密官），サイェードオヂー（書記官）など王宮内に勤務する貴臣顕官達は，

1） 先端がいくらか後方に反り気味になった“烏帽子”状の帽子（ビルマ語名 Baung）[2] を被るか，または先端を後頭部で兎の耳のようにピンと立てた（ビルマ語 Yon-naywet）鉢巻状の布（ビルマ語名 Hpawt-lonbaung）を頭に巻くかしている。

1) Michael Symes (1795, 1800, 1803); Hiram Cox (1821, 1825); Henry Yule (1858).

2) 国王から臣下への御下賜品のひとつで，位階に応じて材質や装飾に違いがある。ボードオパヤー王の治世（1781～1819）には，材質がビロードと布の二種で，花飾り（Hmaw-bwint）の数が3個から12個，三角型（または山型）飾り（Tamaywet htaung）の数は6個から12個あり，合計7種の Baung が知られていた。Yi Yi (1974) p. 362, ニャウンヤン時代末期およびコンバウン時代初期の王室行事を記したと言われる『インヨン文書』（ビルマ文）によると，当時の Baung は，王子の場合が金の花飾り9個から7個付きでビロード製，元老（Wungyi），枢密官（Atwinwun）など臣下の場合には，国王に拝謁する際の宮殿内の位置（Taw, Du, Sani, Bawaw など五段階に分かれる）に応じて花飾り7個から3個付きの繻子製となっていた。Thiri Uzana (1968) pp. 87～8. なお，Taw 以下の座（Neya Ngathwe）については，Wundauk U Tin, p. 19; Zeya Thinhkaya (1963) p. 24; Judson (1953) p. 581. コンバウン時代でも後期のターヤーワディー王（1838～46），ミンドン王などの頃になると，花飾りと三角飾りとの数が一致するようになった。1840A.D. 1854A.D. などの下賜品をみると，皇太子を含めて王子の場合が飾り18，王孫15，元老12，枢密官9である。Konbaungzet, Vol. II, pp. 599～601, Vol. III, pp. 176～184.

2）耳朶には，針状の細長い耳飾り[3]を挿し込んでいる。ニャウンヤン時代のようなラッパ状または円錐型あるいは扇型の大型耳飾りは見られない。

3）上は肩から下は脛全体を覆うくらいの長さのあるゆったりした丹前状の広袖付き上衣（ビルマ語名 Wut-lon）[4] もしくは褙が腰までの長さしかない筒袖付きの上衣（ビルマ語名 Htaing-mathein）を身につけている。ニャウンヤン時代に普遍的であった半袖付きの貫頭衣（ビルマ語名 Thindaing）はもはや見られない。

4）肩から反対側の腋の下にかけて斜めに綬（ビルマ語名 Salwe）を懸けている。綬は，紐（あるいは鎖）の本数や玉の数が身分位階に応じて異なる[5]。

5）上衣の下には白色の内衣（下着）を着，下半身にはニャウンヤン時代同様ロング・スカート状の長い下衣（Pahso）をはき，足には爪先が反り返った靴（Chinin）を履いている。

（Ⅱ）兵士達は，“陣笠”状の帽子（ビルマ語名 Maukto）を被り，内衣（myin-to）は長袖，上衣（myin-she）は半袖で，腰帯を締めている。下衣は膝の上あたりまで捲り上げ，股間を通して締めつけている。

（Ⅲ）貴族の女性達は，

1）ニャウンヤン時代同様，環状の髪飾りを通して髪を頭の真上に高く結い上げて（Yagin-don）[6]，髪の先端を折り曲げるか，頂上に丸髷を作るか，後頭部で束ねるか（Nauktweton）している。

2）内衣（Yinzi）によって上半身，ことに胸元から腹部にかけての部分を締めつけている。

3）ニャウンヤン時代とは異なり，褙こそ腰までの長さしかないが筒袖付きの上衣（Htaing-

3）国王からの下賜品のひとつで，Baung の場合と同様，身分位階によって材質（例えば，金，エメラルドなど），形状を異にした。コンバウン時代には，ボードオパヤー王の治世から末代のティーボオ王に至るまで，王宮内で使用されていた耳飾りは Midwin と Kyet-yin の二種だけであった。Yi Yi, p. 328. 前者は管が中空，後者は閉塞している。Taw Sein Ko (1960) pp. 243～4. 前者にはさらに他の小飾りを付ける事も可能であった。なお，後者よりも前者のほうが高級である。

4）やはり国王からの下賜品のひとつで，王子および元老，枢密官など“Taw”の座に列する高貴な身分の者はビロード製，“Du”の座に列する24人は更紗，“Sani”座以下の72人はレース編みであった。Wungyi Thiri Uzana, pp. 87～8.

5）左側の肩から右腋下へ斜めに吊すのが正式な懸け方である。鎖の数は，次のように文献（i）U Wun, p. 529,（ii）Yi Yi, pp. 220～1,（iii）Cady, p. 15,（iv）Wungyi Thiri Uzana, pp. 87～8 相互間で異なる。

	国　王	皇太子	王　子	王　族	元老，枢密官	Tawの座
(i)	24	21	18	15	12	—
(ii)	24	21	18	—	9	—
(iii)	24	18	12	—	9	—
(iv)	—	—	—	—	7	5

こうした違いは時代によるものかもしれない。1854A.D. にミンドン王によって下賜された Salwe の鎖の本数は，文献（i）と同様，皇太子21，王子18，王孫15，元老，枢密官12であった。Konbaungzet, Vol. III, pp. 176～184. ところがニャウンヤン時代（ピェー王，ミンイェーチョオティン王，サネー王それぞれの治世）には，王族，貴族(臣)を問わず5本だけであった。U Kala, Vol. III, pp. 225, 262, 280.

6）Yagin は，王妃，王女達が結った髪型である。Yi Yi, p. 406.

mathein）を着ている。下衣（Htamein）は足首より遙かに長めで，歩く時は床または地上を引きずる。

4） 両肩にかけ胸前で交差させるか，あるいは肩から腋の下にかけて斜めに，ショール状の長い布（Sulya または Tabet あるいは Pawa）を羽織っている。

5） 男性の場合同様，針状をした細長い耳飾りを耳朶に挿し込み，爪先が反り上がった靴を履いている。

上述のような風俗的特徴は，壁画の上からも確認できる。この当時の壁画に描かれた人物の容貌および服装上の特徴を列挙すると次のようになる。

男女共顔の輪郭が縦の楕円形すなわち卵形（俗に"瓜実顔"とよばれる）顔（例：スーラーマニ，カンマチャウン，シュエヤウンドオ寺院など）で，ニャウンヤン時代の壁画に見られる男性の方形，女性の逆三角形とは対照的である。ことに，ニャウンヤン時代特有の片頬のふくらみはコンバウン時代には完全に消失している。また鼻梁が描かれるようになり（例：ウパーリ戒壇），ニャウンヤン時代の丸鼻（いわゆる"団子鼻"）は見られなくなる。女性の髪型には，ニャウンヤン時代のような頂上への結い上げ型(Yagindon）も依然としてみられる（例：アーナンダ煉瓦寺院，ミンガラーシュエ寺院，シュエヤウンドオ窟など）が，王宮外または下層社会ではいったん髪を後頭部へ梳りゆったりした大きな髷を襟首のあたりで結う型（ビルマ語 Nauktwe-don，例：スーラーマニ，ポーカラー，キンムン村のザッソンなど）が主流となる。女性の髪型は，パガン時代に55種[7]，タールン王の頃（1629～48）には37種，バヂードオ王の頃（1781～1819）には7種知られていた[8]と言われているが，壁画に表われる髪型としてはニャウンヤン時代の中央直立型とコンバウン時代の後髷とが最も代表的である。一方男性は，周囲に山型（または三角型もしくは木の葉型）の飾り（ビルマ語名 Tamaywet-thaung）が幾つも付いた"烏帽子"状の帽子（Baung，例：ローカアウンミェー，ミーパウチー，マミンブーなど）のほかに，頂上に人差し指くらいの長さの突起物が付いた椀状（正確には"椀を逆さにした"形）の帽子（Thanbayagun Okehtok）をもよく被っている（例：スーラーマニ，カンマチャウン，アーナンダ煉瓦寺院など）。さらにコンバウン時代も後期になると，鉢巻状の布（Hpawt-lonbaung）を締めている姿もよく見かけるようになる（例：ポーカラー，チャウトオヂー，パレイなど）。無帽の場合や鉢巻状の布を締めている場合には頭髪が見えるが，そのような場合男性は前頭部すなわち額の上のあたりで髷（Yaungdon）を結っている（例：ウパーリ戒壇，ポーカラー，シュエタンティッ寺院など）。服装の面では，ニャウンヤン時代の男性に共通してみられる半袖付きの貫頭衣（Thindaing）が完全に姿を消し，代わって長袖の付いた前開き式（日本の着物と同様に釦は付いていない）の上衣が優勢となる。この

7) U Hpe Maung Tin, (1947) pp. 112～3; Encyclopedia Birmanica, Vol. 4, 1967, p. 289.
8) U Wun, pt. 5, p. 831.

上衣には3種類の存在が認められる。すなわち裾の長短によって裙が腰までしかない短裾型上衣（Htaingmathein, 例：ミンガラーシュエチャウン，カンマチャウン，アーナンダ煉瓦寺院など）と足までを覆う長裾型上衣とに分かれ，さらに長裾の場合は袖口の広狭によって広袖型（Wut-lon, 例：ミーパウチー，マミンブーなど）と筒袖型（Thoyin, 例：スーラーマニ，ボーカラー，チャウトオヂーなど）とに分かれる。広袖型の場合は袂が長い。次に兵士が装備している武器であるが，ニャウンヤン時代の兵士にみられる槍，刀，弓，楯などのほかに，鉄砲（例：アーナンダ煉瓦寺院，ローカアウンミェー，パレイなど），大砲（例：ボーカラー，シュエヤウンドオ，シュエタンティッなど）が姿を現わしている。これらの火器は，ニャウンヤン時代の壁画には見られないものであった。

一口にコンバウン時代とは言っても，前半期すなわち18世紀後期から19世紀前期にかけてと，後半期すなわち19世紀中期から後期にかけてとでは，風俗的にいくらかの違いが認められるので，本稿ではコンバウン時代を前期と後期とに分け，そのうちの前期について記述する事にしたい。

II　コンバウン時代前期の壁画の所在地

1）ウパーリ戒壇（Upali Thein）

ニャウンウー町からパガンへ通じる自動車道路の右横に建っている一階建ての小さな建造物（寺院番号 2121/1416）で，ティーローミンロー寺院から見ると道路を隔てて北東の位置にある。ウパーリという名称は，建物内部の壁画にあるウパーリ長老の名前に因んだものらしい。建物には東西南北に一箇所ずつ入口があり，室内の西側に大きな降魔成道像が鎮座している。

壁画は，天井および四方の壁面全体に描かれているが，南壁面だけは大半が剥落している。鮮明なのは東西両壁面と北壁の東半分とである。壁面は上中下の3層に分かれ，各層の下にはビルマ語による説明文が記されている。それらの説明文によると，上層には過去28仏の成道像が，中層には乗馬，乗象姿の各仏の出家図が，そして下層には釈尊の安居を迎える図が描かれている。

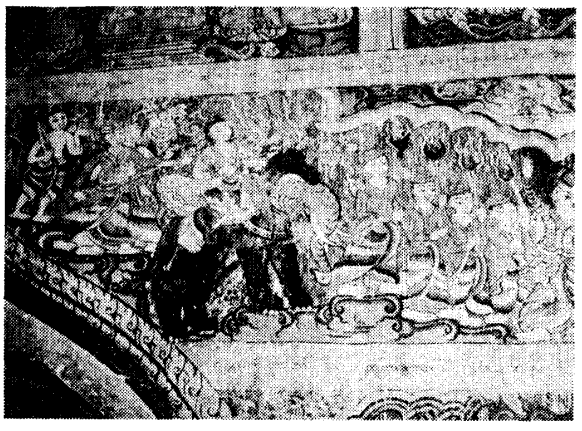

写真1　ウパーリ戒壇中層の出家図

中層の出家図には当時の風俗が反映されているようである。顔は円顔で，眼がぱっちりと見開かれ，二重瞼（上瞼が三本線で強調されている）で，眉はほっそりとしていて長い。ニャウンヤン時代の画とは異なり眉毛と眼との間隔はさほど離れていない。またニャウンヤン時代特有の頬のふく

らみも見られない。さらに，鼻梁がくっきりと描かれていて，ニャウンヤン時代の“団子鼻”は影を潜めている（写真１）。髷は直立型で前頭部で結われている。耳飾りは円形である。服装は上衣と下衣に分かれるが，上衣(Thoyin) は薄手の生地を使っているらしく裾がふわりと広がっている。釦を使っている様子はみられない。胸紐もないようである。袖は長袖で，袖口が手首までである。下衣はだぶだぶで，裾は長いが，袴とは異なり二股に分かれてはいない。履物は履かず素足である。

ウパーリ戒壇の壁画は，従来ニャウンヤン時代に属すると考えられてきた[9]が，墨文の中に『小暦1156年に描いた』という記述が見つかった事からコンバウン時代初期（1794 A.D.）の作品である事が判明した。なお，色彩的には赤と緑の二色が中心で，赤は下地に，緑色は衣服や建物，樹木などに用いられている。

2） **スーラーマニ**（Sulamani）**寺院**

パガンの東約1.6キロ，パガンからミンナントゥー村へ向かう牛車道をやや北に入った地点にある。パガンでも大型寺院のひとつ（寺院番号 748/364-ka）だが，壁画が残っているのは南に面した中央入口を入って右側すなわち南回廊の北壁（内壁）だけである。

壁面は上下六層に分かれ，最上層が28仏，その下は安居を迎える釈尊の姿，第３層は仏陀を礼拝する弟子80人の姿，第４層は托鉢に廻る出家の群像，第５層は世俗社会の様相，第６層すなわち最下層は地獄図となっている。この内最もユニークなのは第５層で，そこには世俗社会の日常生活が事細かに描き出され人々の眼を引きつける。例えば，窓から外を眺めている女，タバコをくゆらせている男，手を洗ったり皿を洗ったりしている女，髪を梳いたり鏡を覗き込んだりしている女，機織りや糸紡ぎをしている女，水壺を運んでいる女，洗濯している女，裾を捲っている女，楽士，踊っている女，曲芸師，それを見物している群衆，裸身の男など，様様な姿態の人間群像がいきいきと描き出されている。

写真２　スーラーマニ寺院南回廊内壁第５層の人物図

ここの壁画も，ウパーリ戒壇の場合同様ニャウンヤン時代の作品だと言われてきた[10]が，人物群像の容貌や服装，画法などの特徴からコンバウン時代初期の作品だと判断される。すなわち，(1)人物の容貌が男女を問わず卵型すなわち瓜実顔である。ことに男性の場合，ニャウンヤン時代に特有の頬のふくらみがない。また鼻は高く，鼻

9) Archaeological Dept. (1966), p. 23.
10) *ibid.*, p. 23.

梁がくっきりと描かれている。(2)女性の髪型がニャウンヤン時代とは異なる。すなわち，いったん髪を後のほうへ梳り，襟首のあたりで束ねている。(3)女性の下衣は爪先まですっぽり覆っていて露出部分が全くなく，裾は後に引きずるくらいに長い。(4)男性は茄子のへた状すなわち頭部全体を薄く覆い中央部に突起の付いた逆さ椀型の帽子を被っている。無帽の時には前頭部で髷を結っている。(5)男性の上衣は袖口が手首までである筒状のぴっちりした長袖である。ニャウンヤン時代に共通してみられる半袖の貫頭衣を着た姿は全く見られないなどの非ニャウンヤン的特徴があるからである。

しかしまた一方では，(1)女性が胸元から腰までを覆うぴっちりした袖なしの内衣を着用し，ショール状の長い大きな肩掛け（Sulya または Tabet あるいは Pawa）を羽織っている。(2)男女を問わず眼と眉との間隔が広い。(3)長柄状の耳飾りと並んで扇型の耳飾りも使われているなどのニャウンヤン的特徴も部分的に残っているので，コンバウン時代でもかなり初期の段階，ニャウンヤン時代に近い頃に描かれたと推測される。

3）**ミーパウチー**（Mipaukkyi）**寺院**

ティローカグル窟やローカフマンギン窟と同様，サガイン丘陵の一隅にある。ただし煉瓦造り方形の建物であって窟ではない。この寺院は，インワ王朝のナラパティ王（1443～69）の王女ヤダナーデーウィーの乳母夫妻によって建立された[11]と言われるミーパウチー仏塔の境内にある。ミーパウチー仏塔はアーナンダトゥリヤ僧院の南隣りにあり，長大な方形の塀で囲まれ，東西南の三方に煉瓦造りの段々道が設けられている。

壁画は，境内東側にある煉瓦造りの方形の建物（礼拝堂）の内部壁面に描かれている。画題は，地上に跪き両手に花を捧げ持って礼拝している貴族の姿である。これは，ピンヤのシュエズィーゴン窟やパガンのヤダナーミンズー寺院の壁画にみられるように，ニャウンヤン時代に好んで描かれた構図のひとつである。貴族の姿は左右の壁に3人ずつ，合計6人描かれている。残りの壁面は漆喰が剥離して煉瓦地が露出しており，壁画は確認できない。描かれている貴族像は，ティローカグルやローカフマンギンの人物像に較べて著しく大きく，等身大に近い。顔の輪郭は卵型で，ニャウンヤン時代の男性像に共通する頬のふくらみは全く見られない。眼は大きく，上瞼は二重で，眉は細く三日月型をしている。眉と眼との間隔はかなり広い。鼻はニャウンヤン時代のような“団子鼻”ではな

写真3　ミーパウチー寺院の貴族の合掌礼拝図

11) *R.D.A.S.B.* (1962), p. 11.

く，すんなりした鼻梁が描かれている。上半身にまとっているのは裾の長いゆったりした丹前状の上衣（Wut-lon）で，下半身には足首まで覆う末広がりのふわりとした下衣を着用し，頭には下部に山型（または木の葉型）の飾り（Tamaywet-htaung）が幾つも付いた烏帽子状の帽子を被っている（写真3）。後頭部には耳覆い（Nagin）が付いているが，ローカフマンギン窟の場合とは異なり形が大輪の菊の花弁状をしている。環状の首飾りおよび馬蹄形（正確には蹄鉄型）の胸章（単玉付き）を胸に下げ，腋の下には複数の玉付きの綬を吊している。

こうした特徴は部分的にはティローカグルやローカフマンギンの人物像と共通するものの，ここの壁画が描かれたのは前二者よりもかなり新しくコンバウン時代の初期だと考えられる。それは，顔の輪郭が卵型で頬のふくらみを欠いているという事のほかに，上衣の袖がティローカグルのそれよりもかなり長めで肘の先まで達していること，袖口が“振袖”のように大きく開いている（従って袂が長い）こと（これは Wut-lon の特徴である。同じ長袖の上衣に Thoyin や Htaingmathein があるが，広袖ではなく筒袖である点で区別される），ニャウンヤン時代特有の扇型（または円錐形）の大きな耳飾りを耳朶にはめていないこと，上衣や下衣の襞や折り目，皺などが細かく描写されニャウンヤン時代の人物画に較べて画全体が著しく写実性に富んでいることなどの非ニャウンヤン的特徴による。なお色彩的には白が生地に用いられ，ティローカグルの赤やローカフマンギンの緑とは対照的である。

4）**シュエグーター**（Shwegutha）**窟**

アマラプーラ町のシュエグーチー（パウンレー）仏塔の南口を出て小道沿いに行くとシュエグーター仏塔がある。土地の人々の間では，「中国人姉妹の仏塔」（Tayok Nyi-Ama Hpaya）という名で知られている。仏塔には西側に向かって洞窟が二つあり，入口左右の壁面にビルマ語の墨文が記されている。北側には9行ある。南側の5行はその続きである。[12] この墨文には仏塔の建立者，建立の年などが記されており，その中に Shwegutha という名称が見られるので，この仏塔の正式の名称はシュエグーターであることが判る。また北壁墨文第1行目の“Gandalaraj 国にて出生し”の記事から，建立者が中国生まれの女性であることがうかがえる。仏塔建立の年は，北壁墨文の第7行目の記述によると『小暦1149年ダバウン月』すなわち1787 A.D. である。

壁面は上下3層に仕切られており，各層の下にもビルマ語の説明文が記されている。その説明文によると画題は本生譚，なかんずくマハーニパータで，第538話唖蹇本生物語，第542話カンダハーラ司祭官本生物語，第545話比豆梨賢者本生物語などが中心となっている。北壁墨文の上層には両手に三角小旗（alan または dagun あるいは kot-ka）を捧げ持ち合掌した4人の貴族の姿が描かれている（写真4）。ミーパウチー寺院の壁画と基本的には同一の構図である。“烏帽子”の左右に付いている鶏冠状の大きな耳覆い（Nagin），前部が太く後部が細く

12) *R.D.A.S.B.* (1963), p. 22.

写真4　シュエグーター窟北側壁面の合掌礼拝図とビルマ語の説明文

なった耳飾り，首の回りの幅広い環型の首飾り，半袖の上衣など，ティローカグルやローカフマンギンの壁画との間に共通した面ももっている。また左肩から右腋下へと斜めに吊した綬（ただし三玉付き）や手首にはめた環などは，ピンヤのシュエズィーゴン窟との間にも共通性を示す。さらにまた環型の髪飾りを通して髪を頭上に結い上げた女性の姿や片手に丸楯，片手に短槍をもち陣笠（Mauk-to）を被った兵士の存在などは，ニャウンヤン時代の壁画とあまり変わりがない。しかし，男性の頬のふくらみが見られないこと，団子鼻ではなく，鼻梁が描かれていること，袖は長袖，裙は腰までしかない短い上衣（Htaingmathein）を着ていること，銃を構えたり肩に担いだりしている兵士が描かれていることなどの特徴は，ここの壁画がコンバウン時代の作品であることを証明している。

5）**カンマチャウン**（Kanma Kyaung）**窟**

パガンの西北，タウンビー村にある小型の仏塔で，シュエグーター同様，内部に窟が設けられ，その壁面に壁画が描かれている。画の下に記されているビルマ語の説明文によると，迦毗羅城内における悉達多太子の生活を描いたもので，各画の仕切りにはウパーリ戒壇と同じ波状の曲線が用いられている。人物像の容貌や服装など画法上の特徴も，ウパーリ戒壇のそれと同質である。男女共切れ長の明眸（上瞼を三本線で表わしている）で，鼻筋がとおり，眉毛は長い。耳には丸型の耳飾りをはめている。男性の上衣は薄い生地で作られていて裾がふわりと広がり，襟なし，長袖である（写真5）。下衣はやはり裾がふわりとしており，足全体をゆったり覆っている。王族は尖塔型の冠（Tharahpu）を，貴族達はスーラーマニの人物像同様中央に突起の付いた逆さ椀型の帽子を，それぞれ被っている。無帽の場合は髷を頭のやや前寄りの位

置で高々と結っている。女性は花弁状の髪飾りを通して髪を高く結い上げ先端を後に垂らすか，髪全体を後に伸ばすか，襟首で束ねるかしている。胸元と腹部を覆うぴっちりした内衣と，両肩，背中，腰を覆うショール状の長い外衣，裾を引きずるくらいに長く大きいゆったりした下衣とを身に着けている。建物はニャウンヤン時代よりも豪華さと精巧さを加えてきており，多層になった屋根以外に，壁や窓，軒先の飾り，屋上の尖塔などが細かく描かれている。色彩的には青（空色に近い）と朱の二色が中心で，白，黒，茶色などが補完的に使われている。

写真 5　カンマチャウン窟の迦維羅城における悉達多太子の姿

6）**ミンガラーシュエチャウン**（Mingala Shwe Kyaung）

カンマチャウン同様タウンビー村にある。仏塔自体はカンマチャウンよりもやや大型である。壁画は仏塔下に設けられた窟内の壁面に描かれている。各層の下に記されているビルマ語の説明文は壁面の摩滅損壊がひどいため完全には判読できないが，その中の一部は本生譚第541話尼弥王本生物語である。

人物像の描き方は，ウパーリ戒壇やカンマチャウンとまったく同じで，ミンガラーシュエチャウンの壁画がこの両寺院のそれとほぼ同時代の作品であることを語っている。中でも中央に突起の付いた男性の逆さ椀型帽子，裾がふわりと広く袖口が手首まである長袖の上衣，だぶだぶの下衣，髪飾りを通して頭上に高く結い上げ髪の先端を後に垂らすか，襟首のところで大きな髻を結っている女性の髪，胸元を締めつけた内衣，両肩から背中全体を覆うショール状の長い布（スリャーまたはタベッ）等々（写真6）の特徴は，ウパーリ戒壇やカンマチャウンのそれと全く同質である。また，窓から外を眺める女，赤ん坊を抱く女，鏡を覗き見る女などの構図は，スーラーマニ寺院の壁画と共通している。建物の描き方もカンマチャウン同様精緻で，多層の屋根，壁，窓，出入口，鴟尾（棟端の装飾），屋上の尖塔，屋根瓦，板敷きのベランダ，手摺り，階段などが描かれている。色彩的に

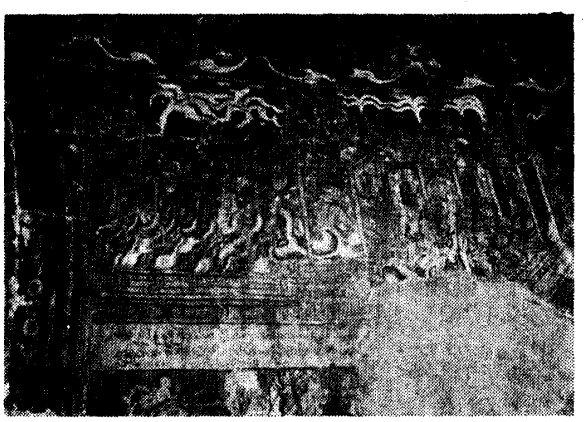

写真 6　ミンガラーシュエチャウン窟の壁画とビルマ語の説明文

は朱色が中心で，それに茶色，黒，空色（薄青），緑色などが使われている。

7）**アーナンダ煉瓦寺院**（Ananda Ok Kyaung）

チャンスィッター王の建立で名高いアーナンダ寺院の北側に隣接した煉瓦造りの寺院である。北に面した入口を入ると内部は回廊と内室とに分かれ，回廊の内外両壁面と天井それに内室の壁面に壁画が描かれている。回廊壁面の画は人物群像，内室壁面の画は金翅鳥や竜虎である。回廊壁面の画は上，中，下の三層に分かれ，下層は大半が剥落，中層は不鮮明，上層はきわめて鮮明である。各層の下にはビルマ語の説明文が記されている。それによると画題は本生譚，なかんずくマハーニパータからの抜粋場面で須弥陀行者や燃燈仏，梵興王などが描かれるが，人物の服装や建物，乗物など背景は当時のビルマ社会，なかでも王宮内の生活を写したものと思われる。画法上の最大の特徴は，遠近を上下に代替して表現していることで，色彩的には青と朱の二色を中心に黒と白を配色した華麗なものである。内室正面にはビルマ語の銘がはめ込まれており，この寺院が小暦1137年（1775 A.D.）に建立されはじめ1147年に完成した旨記されている。いわばアーナンダ煉瓦寺院の壁画は，ウパーリ戒壇の壁画同様，18世紀後半を代表する作品のひとつである。

描かれている人物の容貌は男女共縦長の卵型で，特に女性の場合その傾向が強い。眉毛は長いが，位置が眼に対してやや高い。耳飾りは小型でニャウンヤン時代の耳飾りほど目立たない。形も扇型または円錐形ではなく円形になっている。女性の髪型は身分階層によって違うらしく，王宮内ではニャウンヤン時代に見られるような花型髪飾りを通した高い髪が結われているが，一般庶民の場合には髪全体をいったん後へ梳って襟首のあたりで束ねるか，髷を結ったり束ねたりした後残った髪の先を背中に長く垂らすかしている。衣装の面ではニャウンヤン時代とさほど変わりがない。基本は，胸元から腰全体を締めつける内衣と腰から下半身を足先まですっぽりと覆ってしまうゆったりした下衣，両肩および背中を覆うショール状の外衣の三種である（写真7）。なお，上半身裸の場合には下衣を胸元まで引き上げて胸部を隠すような着方（Htamein Yinsha）をしている。男性は裾のところに縦襞が幾本もあり筒袖の付いた上衣（Thoyin）とだぶだぶの下衣を身につけ，頭には中央に突起の付いた逆さ椀型の帽子を被っている。無帽の場合には，頭髪を頂上で束ねている。こうした服装は兵士の場合も同じだが，兵士は下衣を膝のあたりまで捲り上げ股間を通して裾を後から前に廻して締め上げ活動し易いようにしている。所持している武器は槍または銃で

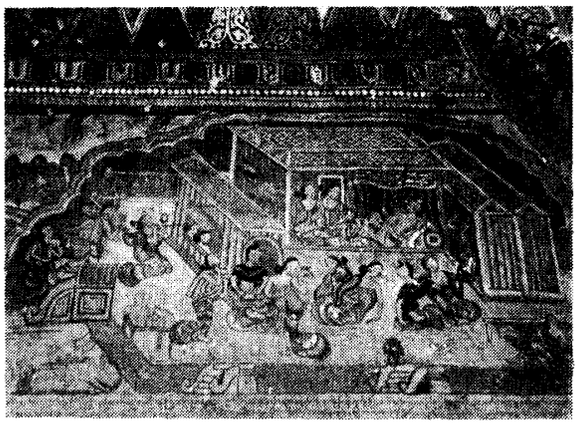

写真7　アーナンダ煉瓦寺院の男女群像図とビルマ語の説明文

ある。司令官とおぼしき人物は爪先が反り上がった靴を履いているが，兵士達は裸足である。

建物は，宮殿の場合は屋根が三層ないし四層になっていて，棟や軒先に精巧な彫刻が施され，屋上には尖塔が高く聳えている。一般の家屋は屋根が切妻式になっており，板または瓦で葺いてある。扉は左右への両開き戸（妻戸），窓は突き上げ窓（これはスーラーマニ，カンマチャウン，ミンガラーシュエチャウンの場合も同様。外側上方に押し上げた窓を二本のつっかい棒で支える）である。高床式の構造であるため家への出入りには階段が使われている。

8）**ミンイェーパヤーダイ**（Minyehpayadaik）

チンドゥイン河の左岸，チャウンソン郡アミン村にある煉瓦造りの建物で，内部に豊かな壁画を蔵するところから地元ではザッソン(Zatson)ともよばれている。壁画は壁面の剥落損傷がほとんどなく，色彩的にもきわめて鮮明である。下地には赤が使われているが，主色は青と赤の二色でそれに黒が加わる。画題は仏伝，本生譚の中の「因縁物語」（ニダーナ・カター）で，不死城（アマラヴァティー）の婆羅門の家に生まれた菩薩，泥土に身を投げ出して燃燈仏を歩ませた須弥陀行者の話や迦葉仏などが描かれている。各層の下にはビルマ語で説明文が記されている。

人物群像は男女共身体の所作がしなやかで，顔はふっくらと丸味を帯びており，眼はぱっちりと大きく二重瞼が強調されている。男性の服装は足元まで覆うゆったりした下衣とラッパ状の大きな耳飾り，王の冠，頂上に突起のある貴族達の逆さ椀型帽子などが中心で，王の場合にはティローカグルやピンヤのシュエズィーゴン窟の壁画にみられる馬蹄形（正確には蹄鉄型）の大きな胸章を付けている。女性は，胸元から腹部にかけてぴっちりと締めつけた内衣と下半身から足元全体を覆い歩く時には裾を引きずるほど長いゆったりした下衣，両肩から背中を覆うショール状の外衣の三種を身につけている（写真８）。髪型は，王妃の場合花型髪飾りを通して髪を高く結い上げている。身分の上下を問わず男性の場合と同じラッパ状の耳飾りを耳朶にはめ込んでいる。こうした容貌上および装飾上の特徴は，ニャウンヤン時代の他の壁画との間に類似性を示すが，ここの壁画がコンバウン時代の作品である事は次のような理由によって明らかである。すなわち男性の大半は上半身が裸で，稀にショール状の外衣（Sulya または Tabet あるいは Pawa）をまとったりはしているが，半袖の貫頭衣を着ている者は一人もいない。のみならず，裙が膝までである前開きの筒袖付き上衣を着ている人さえいる。ニャウンヤン時代に普遍的であった“烏帽子”に代わって突起付きの逆さ椀型帽子を被っている。女官達はすべて髪を梳って後に垂らすか襟首のところで髷を

写真８　ミンイェーパヤーダイの王，貴族，女官の群像とビルマ文

結っている。ここの画は，画全体の艶麗さという点では他に比類がない。強いて言えば，ウパーリ戒壇に近い。背景の岩石や植物の描き方がニャウンヤン時代のそれとは異なりきわめて写実的である。遠近を上下で表現している。なお，ここの壁画に描かれている家屋は高床式で，壁は板壁，窓は開けた時につっかい棒で支える突き上げ窓方式である。屋根は通常二層になっており，軒先や破風に装飾が施されている。尖塔が屋上に重ねられていることもある。

9）**ローカアウンミェー**（Lawka Aungmye）**窟**

モンユワー市から11マイル離れたチャウンウー郡キンムン村の東北，マンダレー・モンユワー間を結ぶ幹線道路を二百メートル東に入った地点にある。[13] 地元の人々からはエータンタイとよばれている。壁画は，この仏塔の下部に設けられた小窟の壁面に描かれている。壁面は上下五層に分けられ，各層の下にビルマ語で説明文が記されている。それによると画題はマハーニパータの中の第541話尼弥王本生物語が中心で，南壁に尼弥王本生話と第547話毘輪安咀囉王子本生物語，北壁に第546話大隧道本生物語，東西壁には二羽の闘鶏と銃を担いだり大砲を引いたりしている兵士の姿が描かれている。上層は左右に弟子を従えた過去28仏の成道図である。これらの壁画が小暦1118年（1756 A.D.）に描かれたことも画の下に記されているビルマ語の説明文によって明らかである。

人物群像の中には顔の大きさが身体に対して大きすぎ不自然な印象を与えるのもある。全体的にいって人物の描き方はコンバウン時代の他の壁画ほど精緻ではない。女性の顔の輪郭はほぼ逆三角形（ニャウンヤン的），男性は卵型で，眼は共に切れ長で大きい。二重瞼を強調するため眼と眉毛との間にもう一本線が加えてある。女性の髪型はひっつめ髪式で，後へ伸ばすか襟首のところで束ねてあるものの，額や鬢のほつれ毛までが描き出され現実感をただよわせている。男性の服装は長袖で前開きになった上衣（Thoyin）と足首まで覆うゆったりした下衣，“烏帽子”または冠（王の場合）とが中心である（写真9）。兵士の服装も基本的には同じだが，下衣を膝のあたりまで捲くり上げて裾を股間を通して締め上げていること，帽子がターバン式あるいは端を後頭部で兎の耳状に立てた鉢巻のいずれかであること，手に銃や槍を携えていることなどが異なる。

写真9　ローカアウンミェー窟の壁画

女性の服装は胸元を覆う内衣と裾が地面を引きずるほどに長い下衣とが中心で，上半身にショール状の外衣を羽織っている人は少ない。そのため両肩と背中の上部とが露出し，ややなまめかしい雰囲気をかもし

13）*R.D.A.S.B.*（1965），pp. 22～3.

出している。耳飾りは円形で小さく，ニャウンヤン時代の壁画ほどは目立たない。遠近は壁面の上下で表わされている。色彩的には朱色が主で，それに緑色と黒とが加わる。

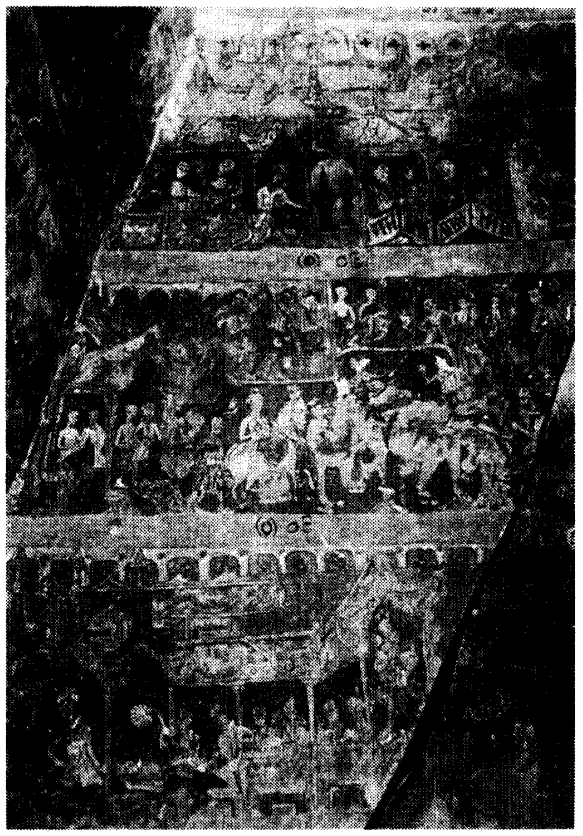

写真10　ヨウソン寺院（キンムン村）の壁画

10）**ヨウソン**（Yokson）**寺院**

キンムン村の第二小学校の北側にある煉瓦造りの方形小寺院（礼拝堂）で，ザッソンともよばれている。内部の壁面は上下五層に分けられ，釈尊の安居精進図が描かれている。ここの人物像は，同じ村内にあるローカアウンミェー窟の壁画に較べて身体のプロポーションが自然体に近い。顔の輪郭は男女共逆三角形で，眉と眼との間隔が大きい。男性は長い筒袖付きの上衣とだぶだぶの下衣とを身につけ，中央に突起の付いた逆さ椀型の帽子を被っている(写真10)。女性は髪を頭上に高く結い上げるか後に伸ばして束ね，両肩にはショール状の布をまとっている。下衣は裾が地上を引きずるくらいに長い。色彩的には朱が地色で，それに黒と白とが加わっている。

11）**シュエヤウンドオ**（Shwe Yaungdaw）**窟**

チャウセー町の北方，スィンカイン郡エーピャ村にある。メッカヤー遺跡の近くである。壁画は，カンマチャウン，ミンガラーシュエチャウン，ローカアウンミェーなどと同様，仏塔の内部に設けられた窟の壁面に描かれている。シュエヤウンドオ仏塔は，バヂードオ王(1819～38)に仕えた舟艇官吏の手になると言われている[14]が，内部の壁面には小暦1160年（1798 A.D.）の墨文がある。[15]

画題は，各層の下に記されているビルマ語の説明文によると，第538話唖蹇本生物語，第541話尼弥王本生物語などの本生譚で，壁面に約40場面描かれている。ただし所によっては壁面の摩滅があり，はっきりしないこともある。人物の顔容は縦長の楕円形で，眼は大きいが瞼の二重はさほど強調されていない。男性は，宮廷に仕える高級官吏の場合は広袖の長い丹前状上衣（Wut-lon）を着，山型の飾り（Tamaywet-htaung）がいくつも付いた“烏帽子”を被って

14) Burma Gazetteer, Kyaukse District. p. 44.
15) ビルマ政府文化省考古局マンダレー分局主任研究官 U Sein Myint Aung 談。

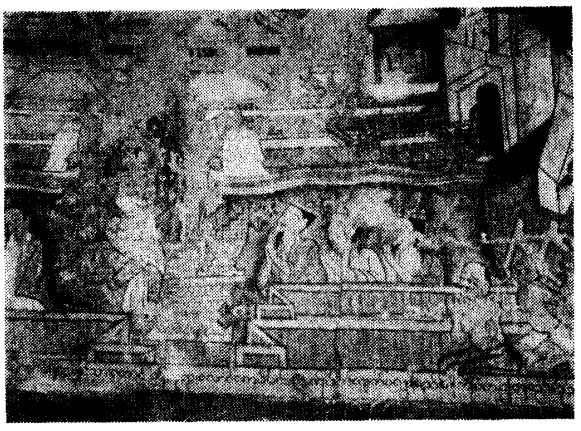

写真11　シュエヤウンドオ窟のテーミ王子と父君，母君および捕えられた盗賊達の画

いる（写真11）が，兵士達が被っているのは陣笠である。鉢巻を締めている者も少なくない。下半身には，裾が足首まであるゆったりした下衣を，歩き易いように前部をやや持ち上げたような格好ではいている。靴は履かず素足である。

女性は大半が髪全体を後に伸ばしているが，王宮内では花弁状の髪飾りを通して髪を高く結い上げ先端を丸めて環を作っている者（王族の子女）も見られる。衣装は，胸元から腰までを覆う内衣をまとい，下半身には足全体が隠れるくらいに長いゆったりした下衣をつけ，肩から背中にかけてはショール状の長い布（Tabet または Sulya）を羽織っている。男女共身体のプロポーションは均勢がとれており，すらりとした形に描かれている。また壁面の上下によって遠近が表示されている。

人物像にくらべると，背景の描き方はあまり精緻とは言えない。建物は集積的で，描かれているのは屋根，柱，床など。屋根は三層ないし四層の多重屋根だが，カンマチャウン，ミンガラーシュエチャウンなどでみられる棟や軒の装飾彫刻は認められない。建物以外では，屋形舟，馬車，鐘楼（時計台），城壁，植物などがみられる。屋形舟は木造で，屋上には板張りの展望台が取り付けられている。馬車は四輪で，箱型の囲いがあり四本柱で屋根付きになっている。鐘楼（時計台）は四本柱，屋根付きの小さな木造建築物で，その中に時を知らせるための大型の両面太鼓が吊り下げられている。屋根付きの木造屋形舟はカンマチャウンやポーカラーチャウンにも描かれているが，ポーカラーでは舳先が竜頭になっている。屋上に尖塔のある舟はスーラーマニ寺院でみられる。いずれも櫓は用いず櫂で漕いでいる。屋根付きの馬車は，ローカアウンミェー，ヨウソン，ミンガラーシュエチャウン，アーナンダ煉瓦寺院などでも見られるが，前二者では四輪で四頭立て，後二者では二輪で二頭立てになっている。太鼓を吊り下げた屋根付きの鐘楼（時計台）は，スーラーマニ，アーナンダ煉瓦寺院，ミンガラーシュエチャウンなどで，煉瓦造りの城壁はローカアウンミェー，アーナンダ煉瓦寺院，スーラーマニ，ミンガラーシュエチャウン，マミンブー寺院，ポーカラー窟などでも，それぞれ見られる。

12）**スィンフナカウン**（Hsin Hnakaung）**窟**

モンユワー市から約11キロ北に離れたアロン村にある。この村はかつてボードオパヤー，バヂードオ両王に仕え第一次英緬戦争におけるビルマ王国軍総司令官として1825年に戦死したマハーバンドゥラの領地であった。[16] 現在ではボードオヂー・ナッの社があり，毎年その祭礼で

16) Encyclopedia Birmanica, Vol. 8, pp. 451～3.

知られている。[17]

スィンフナカウンの壁画は仏伝で，画の下に記されたビルマ語の説明文によると，浄飯王，悉達多太子，耶輸陀羅妃などの姿や梵天，帝釈天などの像が表わされている。人物の容貌や姿態はキンムン村のローカアウンミェー窟のそれに酷似しており，同時代の，あるいは同系統の画家の手になるものと推測される。アミン村のミンイェーパヤーダイのような華麗さこそ欠いているものの，画全体が写実的で現実感をただよわせている。顔の輪郭も卵型などではなく，頬骨，顎骨などによって凸凹があり，眼と眉との間隔，額の広さ，目，鼻，口相互の位置なども自然の姿に近い。女性の場合は鬢のほつれ毛までが丹念に描かれている（写真12）。一般に，女性は髪を襟首のところで束ね，襟元の開いた長袖の上衣を着ている。男性は山型飾りが幾つも付いたいわゆる“烏帽子”を被り，上半身には筒袖付きの長い上衣（Thoyin）を，下半身にはだぶだぶの下衣をまとっている。八の字型の口髭や山羊鬚を生やしていてどことなく世帯じみた感じを受ける。描かれている建物は豪華なものではない。三層の瓦屋根あるいは尖塔付きの屋根をもち，一階建てで，壁や窓なども描かれている。馬車もみられるが，二頭立ての尖塔屋根付き四輪馬車である。色彩的には茶色が主（下地に使用）で，それに黒と白とが配色されている。

写真12　スィンフナカウン窟の浄飯王と悉達多太子，耶輸陀羅妃の姿

13）マミンブー（Ma Minbu）寺院

イラワジ河の西岸ミンブー市の郊外にある。同名の仏塔の境内にある煉瓦造りの方形建造物のひとつで，キンムン村のヨウソンやサガインのミーパウチーなどと同様礼拝堂である。壁画は内部の壁面に描かれているが，壁面は無数のかすり傷によってかなり痛んでいる。人物の描き方は，身のこなし，手の動きなどにしなやかさがみられ，ニャウンヤン時代の画にあるような不自然さや人工的な硬い姿態はまったく見られない。

男性像には，貴族（あるいは王族）と兵士の二種が認められる。前者は，先端が後に曲り下端に山型の飾りが幾つも付いたいわゆる“烏帽子”を被り，肩から腰全体を覆う丹前状の上衣（Wutlon の一種と思われる。袖口は広袖で袂が長い。ただし手首までは達しておらず肘のやや先までしかない）を着用し，下半身には足先までを覆うゆったりした下衣をつけ，下腹部にカンマチャウンの男性像のような長い帯を垂らしている。耳には花弁状の耳飾りをつけ，これ

17) Burma Gazetteer, Lower Chindwin District, p. 36.

も花弁状のかなり大きな飾り玉の付いた綬を下げている。眼は切れ長でぱっちりと大きく見開かれ，細くて長い眉毛と高い鼻筋とが印象的である。頬から顎にかけての線は流線形で，幾らか女性的な趣を漂わせている。兵士達は陣笠を被り，筒袖の付いた上衣を着用し，大きな円形の楯あるいは上が波型になった方形の楯を携えている。

写真13　マミンブー寺院の男女貴族図

女性は，環状の髪飾りを通して髪を頭上に高く結い上げ髪の先端を後に垂らしている。男性の場合と同様，袖口の広い長袖の丹前状上衣を着，下半身には裾を引きずるほど長いゆったりした下衣をつけている。眼が大きく鼻筋が通っていて，男性よりも幾らか顔の輪郭が楕円形に近い（写真13）。両端が反り上がった二層の屋根のある家屋についてはあまり精巧な描き方はしていないが，樹木や岩石，山など自然の風景の描き方は実に見事で，南宗画をほうふつとさせるものがある。色彩的には赤と青の二色が中心だが，赤には朱色から茶色まで，青には濃青色から薄緑色までのバリエーションがみられる。各層の下にはビルマ語の墨文が記されているが，ひどく摩損していてほとんど判読できない。

14）　アーナンダ寺院近くの名称不詳寺院

ニャウンウーからパガンへと通じる自動車道路がパガンに到達する直前，すなわちサラバ（タヤバ）門のやや東側の所からアーナンダ寺院へと通じる小道が南のほうに延びている。その小道の直ぐ西側に名称不詳の小寺院がある。その内部にかなり鮮明な壁画があることが，文化省考古局のパガン分局主任研究官ウー・ボーケー（U Bo Kay）によって明らかにされた。1976年初頭ビルマを訪れた京都在住の民俗美術研究家井上隆雄氏がウー・ボーケーの案内で撮影してきたカラー写真12葉が，おそらくこの寺院の壁画に関する写真としてはわが国最初のものではないかと思われる。

井上氏の好意で写真12葉を調べさせてもらった結果，次のようなことが判明した。この寺院の壁面は上下数層に分かれ，各層の下にはビルマ語の説明文が記されている。それによると，上層は袈裟を偏袒右肩にまとい結跏趺坐して左手を与願の印，右手を触地印に結んだ過去28仏，中，下層は仏伝，なかんずく「因縁物語」である。描かれている場面は，迦維羅城内の浄飯王と悉達多太子，健渉の悲死，悉達多太子の落飾，鹿野苑での苦行，尼連禅河畔における須闍多女の乳糜供養，王舎城内の頻婆沙羅王，王舎城へ托鉢に赴く釈尊，頻婆沙羅王の帰仏などである。

描かれている人物の容貌，衣装，髪型，装飾などの特徴から判断すると，ここの壁画がコン

バウン時代の作品であることは明白である。男性は，(1)王の場合，大きな耳覆いの付いた冠，馬蹄型の首飾り，花型の大きな耳飾りと手首の腕飾り，長い筒袖付きのふんわりした上衣と足首まで達するゆったりした下衣，(2)貴族の場合は，木の葉型の飾り（Tamaywet-htaung）の付いた“烏帽子”，両肩を覆うショール状の大きな布，同心円状の耳飾りと腕環，ゆったりした下衣，(3)庶民の場合は，頂上に直立型に結い上げた髷，裸の上半身，腰のあたりまで裾からげをした下衣などを特徴とする（写真14）。一方，女性の場合は，花型飾りを通して頭上に高く結い上げ先端を後に細長く垂らした高貴な身分の者の髪型（庶民は，髪を後に梳って襟首のところで束ね，さらにその先端を丸めて環を作っている），円筒形の長い耳飾り，幅広の首飾りと手首の腕環，胸と腹を締めつけた内衣，両肩から背中全体を覆うショール状の布，ふんわりした下衣などを特徴とする（写真15）。顔の輪郭は男女とも楕円形で，眼がくりくりと大きく，二重瞼で眉が濃く，鼻筋がくっきり描かれ，全体として整った顔立ちをしている。容貌的には，アミン村のミンイェーパヤーダイの壁画に酷似している。

写真14　アーナンダ寺院近くの名称不詳寺院の「王舎城内の釈尊と頻婆沙羅王」の壁画（井上隆雄氏撮影）

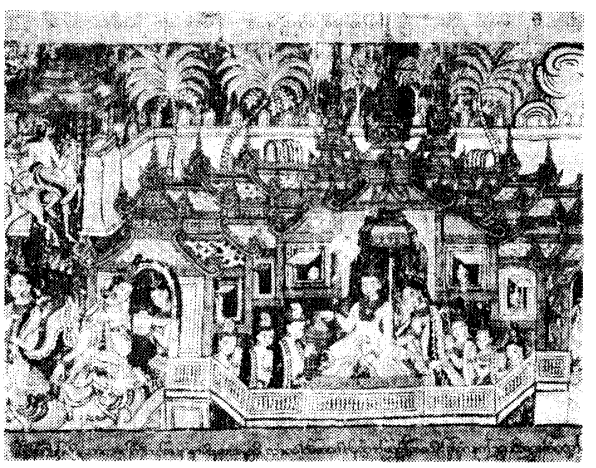

写真15　アーナンダ寺院近くの名称不詳寺院の「王舎城内の釈尊と頻婆沙羅王」の壁画（井上隆雄氏撮影）

建物は，王宮の場合には瓦を葺いた多層屋根，屋上の尖塔，棟端の装飾，突き上げ式の窓（開けた時，つっかい棒で支える），板壁，床などが描かれ，一般の家屋は単層屋根の平屋で，入口は左右への押し開き戸，床は高床式で階段を使って出入りするようになっている。樹木の描き方も写実的である。遠近は上下で表わされている。色彩的には青と茶とが中心で，それに白と黒とが加えられている。下地には朱色を使っていたようである。

15）その他

コンバウン時代前期の壁画には，以上のほかにモンユワー郡モンユエ村のマハーゼータウン

寺の北隣にあるローカフマンギン仏塔の窟などの存在が知られている。ビルマ語の墨文によると，小暦1145年（1783A.D.）の作で，画題はマハーニパータ中の第538話，第542話，第543話，第544話，第545話，第547話などだ[18]という。

参　考　文　献

Bigandet, Rev. P. 1880. *The Life or Legend of Gaudama, the Buddha of the Burma*. Vol. I, II, London.

Cady, J.F. 1968. *A History of Modern Burma*. Cornell U.P.

Cowell, E.B. 1895. *The Jātaka or Stories of the Buddha's Former Births*. Vol. I～VI, Cambridge U.P.

Cox, capt. Hiram. 1821. *Journal of Residence in the Burmhan Empire and more particularly at the Court of Amarapoorah*. London.

———. 1825. *Voyage du capitaine Hiram Cox dans l'empire des birmans, avec des notes et un essai historique sur cet empire*. Paris.

Hardiman, J.P. 1967. *Burma Gazetteer, Lower Chindwin District*. Vol. A, Rangoon.

Stevenson, R.C. & Eveleth, F.H. 1953. *Judson's Burmese-English Dictonary*. Rangoon.

Stewart, J.A. 1925. *Burma Gazetteer, Kyaukse District*. Vol. A, Rangoon.

Symes, Michael. 1800. *An Account of an Embassy to the Kingdom of Ava sent by the Governor-General of India in the Year 1795*. Rangoon.

———. 1800. *Gesandtschaftsreise nach dem Koningreich Ava im Jahre 1795 vom Major M. Symes*. Berlin und Hamburg.

———. 1803. *Reis van een British Gezantschap naar het Koningrijk Ava in het jaar 1795 door Michael Symes*. Amsterdam.

Yule, capt. Henry. 1858. *A Narrative of the Mission sent by the Governor-General of India to the Court of Ava in 1855*. London.

Archaeological Department, Ministry of Culture. 1966. *Shayyoe Myanma Bagyi* (in Burmece). Rangoon.

Encyclopedta Birmanica. Vol. 4 (1967), Vol. 8 (1963). Rangoon.

Hpe Maung Tin, U. 1947. *History of Burmese Literature* (in Burmese). Rangoon.

Kala, U. 1961. *Maha Yazawindawgyi* (in Burmese). Vol. III, Rangoon.

Maung Maung Tin, Wundauk U. 1968. *Konbaungzet Maha Yazawindawgyi*. Vol. III, Rangoon.

Maung Maung Tin, Wundauk U. *Shwe Nan Thon Wawhaya Abidan*. (Mimeograph in Burmese).

Reports of the Director, Archaeological Survey, Burma (RDASB), for 1962, 1963, 1965 (All in Burmese). Rangoon.

Taw Sein Ko. 1960. *Records of the Hluttaw* (in Burmese), Rangoon.

Thiri Uzana, Wungyi. 1968. *Lawka Byuha Kyan* (In-yon Sadan). Rangoon.

Wun, U. 1963～4. *Tekkado Myanma Abidan* (in Burmese). pt. IV～V. Rangoon.

Yi Yi, Dr. 1974. *Thudethana Abidanmya Hmatsu* (in Burmese). Rangoon.

Zeya Thinhkaya. 1963. *Shwe Bon Nidan* (in Burmese). Rangoon.

『南伝大蔵経』第28巻（本生経1）～第39巻（本生経12）。

赤沼智善(訳)1928.『ビガンデー氏緬甸仏伝』東京。

大野徹「ビルマの壁画(Ⅲ)―ニャウンヤン時代を中心として―」『東南アジア研究』14巻2号。

18) *R.D.A.S.B.* (1965), p. 22.